

僕は作りたいものを作る

KASHIRA

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ロケットパンチ、ドリル、いろいろなロマンがある物を作りたいが、モバイルスーツが無い少年が一機のモバイルスーツと出会う

目次

その名はガンダム	1
起動	7

その名はガンダム

C・E30年代に遺伝子改変ブームにより人類は新たな対立が生まれた。受精卵の段階で遺伝子进行操作されて生まれたコーディネーター、旧来の人類ナチュラルその能力の格差により

C・E70年、血のバレンタインの悲劇によつて本格的武力衝突へと発展して11カ月が経とうとした・・・

C・E・70年 ヘリオポリス

「PHUK―068とHC―4210を接続してと、げえ！M288Hの基盤これ使い物にならないじゃん代わりあつたかな？お！こいつで代用するか」

「マスター!!？それだと反応が2秒遅れてしまいます。DOH379の方がいいかとそれに何でもかんでもジャンクを拾ってくるのは、良くないですよ？ちゃんと確認しないと」

「い、いいじゃんかナナミもしかしたらお宝かもし」とか言つてザフトのジンのデータを拾ってくる事はないでしょう。そうやって何でもかんでも拾つて来るから部屋の足の踏み場が無くなるんです!!
「・・・お前はお母さんか」

ここはヘリオポリスにある工業カレッジの研究室の一つ現在一人の少年と球体型独立AIがいるその場所は足の踏み場も無いほどのろいろな部品や素材が溢れかえっていた。少年は用途は不明だか何かのを作っていた。

「たく・・・どうしてそんな風になつたんだ見た目は可愛いのに中身はうるさいよ。まあ見つけた時よりましだけど」

「見た目は貴方の趣味でしょう。ラクス・クラインが持つてるペットロボを参考にしたと・・・貴方が私に自己学習機能を付けてから何年たったと思つているんですか私も覚えます。これで何度目かわかつてますか!?!?」

ナナミは元々少年が壊れた機械のデータをサルベージして見つけた。データ初期起動時単純な事しか言わなつたため少年は、自己学習機能を入れたことで感情が生まれ独立型AIとなつたから専用端末

を作りそれで今のナナミが生まれた。端末は少年がよく聞くラクス・クラインが持つてるハ口を参考にバスケットボールサイズのネコ型になった。ナナミと言う名前はファイル名がPGX73から来ている。

「マスターもうすぐカワグチ教授に呼ばれている時間ですが大丈夫ですか？」

「ええ、もうそんな時間？じゃあこのデータ保存しておいて」

「何ですかこれ？巨大な腕ですか？こんなの今のモバイルスーツに付けてもバランスが悪くなるだけですよ。」

「これは武器だよ。腕を前に出して飛ばすロケットパンチ」

「またこんなの考えて、私のデータバンクに保存されているは、そういうのばかりです。モバイルスーツを持っていないのに、モバイルスーツを持ってから考えてください！」

「いや、最近、カワグチ教授が俺がコーディネイターだから解析能力が高いからって渡されるデータがほとんどモバイルスーツのOSばかりでさあ、このコロニーでモバイルスーツでも作っているかなと思つてたらアイデアがでてきたからさ……ダメ？」

「ダメです。大体中立のヘリオポリスで作れないでしょう。それは条約違反ですから、無理です。あと見た感じメイスやらハンマーだか武器ばかりで、戦闘する気ですか？」

「いやそれ作業用工具だからモバイルスーツサイズだからね。それより行こうかカワグチ教授が待っているし」

少年はナナミを持って研究室を出た。カワグチ教授のラボは少年がいる場所とは違うモルゲンレーテの社内にある。だから大学のレンタルエレカで行かなければならない。少年が、エレカポート着くとそこには知っている顔が居た。

「お、ユウキじやんお前もモルゲンレーテに行くのか？」

「うん、そうなんだよツール。僕カワグチ教授に呼ばれてだから一緒に乗っていい？」

「いいよ。俺たちはカトウ教授のラボに行くんだ。またお前何かしたのか？」

「いや今回は身に覚えがないんだ。てか何で僕が何かした事になつてんの!?!?」

「だって貴方がいろいろな事で有名だもん。ほらホバーボード事件とか」

「いやミリアリアそれは実用実験してただけだし何も問題ないはずだ。」

「じゃあ何でラボの壁が吹き飛んだの?それも1kmも」

「いやスラスターの推進剤をモビルスーツ用の使ったからね。数メートル進むだけ音速になるとは思わなかった。実験には失敗も付き物だからね。何か問題あるかねキラ君」

「何だよそれ、普通に問題あると思うよ」

「そうです。普通はありますよ。やはりマスターはネジが抜けてますね」

「ナナミまで、俺には味方いないのか」

ユウキがそう言うのとエレカの車内で笑いが起きた。エレカの後部席にいるは同じ工業カレッジでカトウ教授のゼミに所属している。トール・ケーニヒ、その隣に居るはトールと同じゼミのミリアリア。ハウで、ユウキの隣に座っているのはキラ・ヤマト、三人共顔馴染みだ

そんな話をしてたらモルゲンレーテに着いた。

「じゃー僕はここでみんなまたね」

「ユウキまた変な事するなよ」

「そんなに頻繁に失敗しないよ。トールバカ」

ユウキはそんな事を言いながら中に入って行った

――

ここはヘリオポリスの資源衛星内でユウキはカワグチ教授のラボの扉の前まで来た。

コンコン「カワグチ教授、ユウキ・ホーネスです。呼ばれて来ました。」

ユウキは扉をノックしたが部屋の中から返事がない

「あれ?いないのかな」

開いていないと思いきやユウキは扉のスイッチを押してみると扉は開いた。中には誰も居なかった。

「教授どこ行ったんだろう？僕だって、忙しいのに・・・」

「マスターの忙しいは武器を作るだけのためでしょうが、一度出直しましょうか。」

「そうだね。少し外で待ってみようか」

そう思いユウキは一旦ラボから出ようと歩こうとしたが、教授の机の上にある物が目に写った。

「これは、モビルスーツの設計図？ザフトのジンでもないしそれにフレームが剥き出しだ。装甲も発泡金属だ重量を軽くする為か、ナナミこんな機体のデータある？」

「データベースに該当する機種がありませんし、ザフト系列の機体ではありませんね。もしかして地球連合のモビルスーツでは？」

「かもしれないね他にもXナンバーって書かれた資料もある。けど何でカワグチ教授がこんな資料を・・・」

そのとき突然、轟音と凄まじい揺れが襲った。

「何だ!?!? 隕石か、こんなときに・・・」

「マスターとりあえず状況確認と避難が先です。階段へ向かいましょう」

「ああそうだね。急ごうナナミ、ナビゲート頼む」

ユウキはナナミの案内で一番近いシエルターに行こうとしたがどのシエルターもいっぱいらしく離れた所まで行かなくてはならなくなつて通路を進んでいたが衝突の揺れのせいか通路が瓦礫で塞がっていたため迂回して進んでいるとある場所に出た。

「何だここは、モビルスーツのパーツ？こんな所で作っていたのか・・・僕の説は正しかったな!?!? どうだナナミ正しかっただろ？」

「そうですねマスターは、馬鹿なのはわかりました。」

「さらっと毒を吐かれた〜」

「だってマスター避難が先なのにこんな分析する余裕があるのですから」

「そうかな〜けどここに完成品は無いね。あるのは予備パーツか

な・・・」

モビルスーツはプロト機であっても、最低3機分のパーツを作るため、部品交換用のが残っていたのだろう。それらを見てみるとそれは起こった。その部屋の天井が崩れてきたのだ。直撃コースでは無かったが、床に落ちた時に起こった風で、ユウキは壁に激突してそのまま気を失ってしまった。

「マスター大丈夫で・・・マス・・・しっ・・・」

”ああ僕は運が無いな”

その後、ザフトと最後に残ったXナンバー、ストライクとアークエンジェルとの戦闘でヘリオポリスは崩壊した。

—————

ヘリオポリス崩壊の数時間後

「うーん・・・はあ!!? どうなったんだ」

「良かった目覚めたんですねマスターは天井が落下して、その風圧で壁に打ち付けられたんです。」

「そうか・・・ナナミ外の状況はどうなってる?」

「現在ヘリオポリス内通信途絶、他にも電力ストップその他反応ありません」

「参ったな、脱出する方法あるかな? とりあえずここに居てもしょうがないし行くか」

ユウキは脱出する方法を探すため通路を進んだそしてある人を見つけた。

「カワグチ教授!? 大丈夫ですか・・・ダメか」

ユウキが見つけた人は、カワグチ教授だった。打ち所が悪かっただろう亡くなっていたがユウキはカワグチ教授の手に何かあるのに気づいた。

「これは何のディスクだ? ナナミちよつと見てくれ」

そう言ってナナミにディスクを差し込んだ。入っていたデータは地図だけだった。

「この場所は? ナナミ何かわかるか?」

「いいえ予測不能です。マスター危険ではありませんか?」

「行って見ないとわかんないだろうが、行くぞ！」

「あ、ちよつとマスタ〜!!?」

ユウキはナナミに反論させず地図が示した場所へ向かった。そして目的地着くとそこにあつたのは……

「モバイルスーツ……」

一機のモバイルスーツだった。

起動

「みんな仕事よ。進路はヘリオポリスお宝探しよ」

「よっしや!!?」

「え〜何でヘリオポリス?あそこは中立でしょう。お宝なんてあるの?」

「数時間前ザフトと地球連合の戦闘によってヘリオポリスは崩壊したわ」

「大丈夫なの!?!?そんな所行って、まだ軍隊とか来るじゃ無いの?」

「そんな時は、逃げるさ、まあ戦いになったら8が助けてくれるさ」

”まかせて私は戦闘のプロフェッショナル。”

「大丈夫かな・・・ロウ本当に行くの?」

「当たり前だ樹里お宝が眠っているんだぜ!?!?さあ行こうぜヘリオポリスへ!!?」

—————

ユウキは今、灰色のモビルスーツの前に居る。

「ナナミこれってカワグチ教授の所で見た資料のモビルスーツじゃないか?」

「そうですねマスターですが、資料とは少し違いますね・・・」

このモビルスーツは資料とは、少し違う点がある。まずバックパツクが、何かを装備出来るジョイントになって、膝当ての形状が違うのと肩が付いておらず剥き出しで、まるで組み立て途中だった。

「未完成品か・・・動くかな」

「え・・・マスターまさか乗るのですか?もう少し他の方法を探しましょうよ〜」

「いいじゃん動くかどうか見るだけなんだから、さ行くよ」

そう言ってユウキは、モビルスーツのコックピットに向かった。

「こ、こいつ!動くぞ!」

「マスター何を言っているのですか・・・」

「いや、何か電波拾って言わなきやと思つてさ・・・さ、調べようか」

まだ調べていないのにユウキは変な事を言った。ナナミは心配に

なった。そんなことを知らずユウキはナナミをモバイルスーツに接続して、キーボードを操作し始めた。

「こいつ、OSも未完成だ。名前は・・・MBF1P06・・・6つてことは後5機はあるのかな・・・」

「マスター、システムチェック終わりました。特に異常ありません、ですがやはりOSが未完成のようです。」

「そっか、じゃあナナミ保存してあるジンのOSを元にして再構築して僕は外部から機体の点検するから」

「了解しました。後データ内にこんなのがありました。」

「ストライカーパック？これXナンバーの一機の装備じゃんか、こいつを取り付けるためのジョイントを付けた実験機の可能性があるな」

ストライカーパックとは、地球連合のX105―ストライクの追加装備で、エール、ソード、ランチャーからなる状況に応じて換装する装備である。またバッテリーの充電も兼ねている。

「はい、ですがそうなるこの機体は、どこが作った機体なのでしょう？」

「この機体は、恐らくXナンバーのデータを使って作られた可能性があるな、作られた場所をみてモルゲンレーテかもね・・・」

「とゆうことは、この機体はオーブが作ったってことですか!!？」
「事情はわからないけどそうとしか思えない。それより作業を進めよう」

ユウキは、この機体の点検を始めた。瓦礫が散乱していたが特に目立つ外傷は無かった。調べてわかったことは、まず周りを見る限り証拠隠滅をはかろうとした形跡があつちこつちにある。近くに二機分のパーツが落ちていて運よくこの機体だけ難を逃れた。それをユウキが見つけたのだ。もう一つはこの機体はグレーカラーではあるがフェイズソフト装甲ではないことだ。Xナンバーの資料には、この装甲が使われていると記載されているが、この機体は、発泡金属だ。フェイズソフト装甲は、通電する事で実弾を無効にするが、この機体は関係なく命中する。ユウキは、ややこしいなと思った。

ユウキがモビルスーツを見つけた数分後、他の場所に、あるジャンク屋達がいた。

「スゲエ、ビームライフルもあるのかよ。」

「けど信じられませんが、新品のモビルスーツが完全な形で、埋もれているなんて……」

「いいじゃん、こんな凄いお宝があったからよ。気にし過ぎだぜ。リーム」

そう言っているのは、ロウ・ギユール、ジャンク屋だ。ジャンク屋は壊れて廃棄されたメカなどを回収し、再利用する職業だ。ロウ達は、ユウキが見つけたモビルスーツと同類機らしい赤と青のモビルスーツをヘリオポリス内で見つけていた。

「けどさ、ここにあの腕とは違う色のモビルスーツがあるってことは、金色の機体は、どうなったの？」

「さあ……持ち出されたか、爆破してしまったかですかね。」

「何にしるお宝は見つけたんだ。大収穫だぜ！」

” 入電 ”

『気をつけてそつちにモビルアーマーが向かってるわ』

「商売敵か!?!」

『違うわね。完全武装した傭兵よ。戦ったら勝ち目はないわ』

「ハチ!!? 起動するぞ、キメラじゃ勝ち目がねえ、コイツなら……」

――――
一方、ユウキは、最終段階に来ていた。

「チェック終了! ナナミそつちは?」

「こちらも基本的なことは終わりました。あとは、起動しながらの調整だけです。」

その時、何処からか地響きが聞こえてきた。

「今の音は……ここも持たない可能性があるな……ナナミ起動するよ!!?」

「了解しました。いつでも行けます!!?」

「よし、ユウキ・ホーネス行きまーす！」

ユウキは、機体を外に向けて発進した。そして宇宙空間に出るとそ

ここでは、モビルアーマーとモビルスーツの戦闘が行われていた。

「どうしよう・・・しばらく様子見かな・・・」

ビービービー「マスターこちらに急速に接近する機体があります。

「ええー!?...こっちには武器ないんだから、とにかく逃げるよ」

こちらに向かつて来る機体は、連合の量産型モビルアーマー、メビウスだ。戦闘するとは思って無かったらしく、武器を持たず外に出てきたのが、裏目に出た。

「うあ!?...何で撃ってきた!?...無抵抗な人間に」

「もしかして、この機体を消したいのでは?一応秘密裏にあつた機体なので」

「なーるーほどって!?...解決してないよ。どうするのこれ」

そうしている内に一筋のビームがきた。

「うわー助かったく・・・あれ?あの機体はこいつの兄弟機か?」

「見たいですね。どうします?一応通信して戦闘の意思がないのをつたえますか?」

ユウキの目線の先には二機の赤と青の機体だ。恐らく同型機だと思われるが、逃げ回る内に近づいていたみたいだ・・・

「.....」

ロウは、あの後戦闘をしたが、傭兵に油断して不意を突かれてしまった所、運悪く傭兵を雇ったクライアントが、証拠隠滅ため攻撃してきた。そのため傭兵に青い機体を奪われ、どうするか考え同型の赤い機体を使って出た。丁度戦闘も終わりがけてた時モビルアーマーがロウ達の母艦ホームにぶつかろうとしていたが、それをロウは撃破そしてこれからどうするか話そうとした時・・・

ビービービー「レーダーに反応!!?」

「何だ。まだいたのか?」

機体に向けてみるとそこには、メビウスと見たことない機体に向かってきた。

「もう一機あつたのか!!?...もう少し探せばな」

”そんな事言ってる場合か、どうする?..”

「どうするって言ってもな・・・」

がすぐに解決した。傭兵に貸した機体が、メビウスを撃ったからだ
「さてとハチあいつと通信をつないでくれ」

”了解”

『うわあ！通信？えっと助けてもらってありがとうございます・・・』

「何だ、こんなヤツが乗っていたのか、あんた目的は？」

『目的？目的・・・脱出ですかね・・・』

「そうか、とりあえずついてきな俺の船で話そうぜ」

『わかりました』

—————

ロウ達の母艦 ホーム内

「さてと、まずアンタらもオレたちと同じ追われる立場になっちまったようだな」

「そのようだ」

「アンタらに貸した青いモバイルスーツだけだな、くれてやるよ」

「いいのか？」

「結果的にこの船を守ってもらったしな、借りは必ず返さなきゃならない。死んだ爺ちゃんがよく言ってたぜ」

「・・・では、遠慮なくもらっておこう」

「効、そろそろリードたちと合流しないと」

「うむ、行くぞ」

そう言って、傭兵達は去った。

「で、あんちゃんは、どうする？目的が、脱出って言ってたけど」

「はい、まず僕の名前は、ユウキ・ホーネス、ヘリオポリスの工業カレッジの学生でした。こっちは、サポートAIのナナミ、僕たちは脱出方法を探していてあの機体を見つけました。」

「ヘリオポリスの!?？みんな脱出したって言ってたけど、どうゆう事リーアム・・・」

「ああ、僕は気絶していてヘリオポリスが崩壊したこともわからなかったんですね」

「へえ〜でこれからどうするんだ」

「恐らく、あなた達と同じで追われる立場でしょね・・・アレの存在も

知ってしまったことですし」

「あれ？あれってなんだ」

「ヘリオポリスで開発されていたモビルスーツのデータです。あの機体とは違う……」

「ほかにもあるのか!!？くうくまだあるかなパーツとかさー」

「いや恐らくないと思いますね。この崩壊はその機体が発端だと思いますね……」

「そうか……で結局どうする?」

「はい、僕たちをしばらく置いてください。機械いじりは得意なので手伝えるはずですよ。」

「いいぜ。よろしくな、俺の名はロウだ」

”よろしく、ハチだ”

こうして、赤と青プラス灰色のアストレイを巡る物語が始まった。